

編集後記

『言語社会』17号をお届けします。

この前に編集委員長となったのは2013年の7号でした。今回はサブティカルあけにいきなり委員長となり、とまどうこともありましたが、おふたりの編集委員に助けられ、ようやく刊行にこぎつけることができました。感謝申し上げます。

昨年5月の執筆申込の時点では27人から手が挙がりましたが、最終的な掲載論文は10本にとどまりました。とくに今回は教員からの投稿がなく、特集も組めなかったのは残念でした。9年前に担当した7号が「一九三〇年代台湾における大衆文化」と「マルクス主義批評の現在」という2つの特集と全部で24本の論文を収録していたことを考えると、今号は分量の点ではかなり「薄い」ものとなっています。ただし厳しい査読をへた、読みごたえのある論文が集まったのではないかと期待しています。

前号の編集後記で安田さんが書いているように、査読やゲラを含めて原稿のやりとりはすべて電子化されています。とくに精興社との校正作業で紙を扱わなくてよくなったのは、負担軽減という点でとても大きなものでした。

年齢からして今回が最後の編集委員長となります。次号が少しでも厚みのある紀要となるよう、みなさまからの積極的な投稿をお待ちしています。

星名宏修

(『言語社会』17号編集委員長／言語社会研究科教授)